

[論文]

# 「真のキリスト者となる」道を求めて

——小川圭治の神学的足跡を辿る——

佐藤 司 郎

## (1)

本日の「小川圭治・森岡巖記念シンポジウム」、小川圭治先生（1927-2012）については平林孝裕さんと私が発題を担当します<sup>1</sup>。平林さんは主として小川先生のキルケゴール研究、バルト研究を中心とした学問的な業績という方面から、私のほうは、そうした学者としての歩みを基本としそれと切り結びながら一人のキリスト者として時代に深く関わって歩まれた先生の足跡をたどります。『福音と世界』の総目次（1992年）が出たとき、一番多く書いていたのは僕だったみたいと先生が言われたことがありましたが、今日はその歩みを、先生が継続してもっとも多く寄稿した『福音と世界』誌を手がかりにしてたどることにします。それは、森岡巖さん（1924-2012）が、1959年から1978年頃まで、同誌の編集責任を負っていたことを考えれば、意味あることだと考えます。

はじめに小川圭治先生との関係に短く触れることをお許し願いたいと思います（小川先生と呼ぶこともお許してください）。先生のお名前は、キルケゴールやバルトの研究者として、またとくに、吉村善夫訳でないもう一つのバルト『ローマ書』の訳者としてもよく存じ上げていましたが、私自身地方にいたこともあり、お会いする機会はありませんでした。先生にはじめてお会いしたのは、1987年9月に、私が留学から帰って信濃町教会に赴任してからです。以来今日まで、同じ教会に属した者として、また神学研究、とくにバルト研究を志す後輩として、親しいお交わりとご指導をいただきました。教会の牧師として改めて感謝しなければならないのは、尚網女学院短大大学長として仙台に赴かれた期間をのぞいて現役の長老としてご奉仕くださっていたことです。また教会の成人教育の一環として開

<sup>1</sup> 本稿は、2012年11月23日午後、日本カール・バルト協会と日本ボンヘッファー研究会の共催で、日本基督教団信濃町教会を会場に開かれた「小川圭治・森岡巖記念シンポジウム——バルト＝ボンヘッファーの線に立って」での発題に加筆したものである。なお今回加筆するに当たり表題を改めた。当日の発題者は、山崎和明、八谷俊久、平林孝裕、および筆者であった。

かれていた講座（基礎講座Bと称していた）で、これも長年にわたって、バルトを中心に基礎的な神学の指導をなさってくださったことも忘れられません。老若を問わず多くの教会員がこれによって信仰を養われ、その力を強くされたことです（「聖和会連絡2012年2月号——故小川圭治氏特集」〔信濃町教会聖和会発行〕に、大口邦雄さん、大脇順和さんが書いておられるものも参照してください）。牧師であった者として今感謝の思いを新たにするだけではありません。バルト神学研究に関連して、直接間接にご指導いただいたことも心から感謝のことです。もっとも正統なバルト解釈を保持しておられるのが小川先生であることは、ご経歴からも、書かれたものからも明らかです。その意味で先生の語られることは、皆さんにとっても、私にとっても、一つの規準として聞き逃すことができないことばかりでした。

今日のシンポジウムの主催者の一方は「日本カール・バルト協会」です。これも先生を中心に1989年前後に——小川圭治訳でE. ブッシュの『カール・バルトの生涯』が刊行されたころ——結成されたものです。カール・バルト協会は、福田正俊先生や井上良雄先生らがつくっておられた「バルト研究者の集い」から出発して、もっと広く共同でバルトを研究し交流を深めようとしてつくられたものです。創立以来会長としてご指導いただきました。専門の研究者だけでなく、バルトに関心をもっている多くの方がたが、全国から参加しておられます——すでに召された細川道弘先生や秋山絵美子さんら、何人ものなつかしい顔が思い浮かびます——。ほとんど毎年かさねず研修会をおこなってきました。智子夫人のお助けなしにはできなかったことです。その中から若い研究者が育ちつつあることは喜ばしい限りです。

## (2)

小川先生が大学（東京女子大、筑波大）の論集や紀要、内外の哲学・宗教の専門誌、キリスト教雑誌に寄せた論考は膨大な数にのぼります。その中でも、とり分け、戦後キリスト教界のオピニオンをリードした『福音と世界』誌にもっとも多く論考を発表しておられます。

最初に名前が登場するのは1955年6月の書評（ウィレー著 武藤一雄・川田周雄訳『キリスト教と現代』）です。さらに翌1956年2月に「信仰と学問」という2頁のエッセーを書いています。以来、座談会出席をふくめれば、ほとんど毎号登場という時期もあり、論文、エッセー、コラム、報告、座談会、書評、等々と、書きつづけられました。最後は、2005年2月の「富岡幸一郎『非戦論』をめぐって——新しい終末論の解釈のもとで」です。

数えれば70本以上書いておられます。これはまったく驚くべき数字です。そしてその後、編集者としての森岡さんがおられたのは言うまでもありません。それにしてもこれだけ多くのものをジャーナルに、キリスト教界を代表する雑誌に書きつづけたということ、そこに小川先生の神学者としての在り方を見るような思いがします。それは、時代の問題、あるいは時代と共に生きる人間、キリスト者、そして教会の問題が、そのまま小川先生の問題でもあった、そしてそれらに誠実に取り組んだということです<sup>2</sup>。先生のキルケゴール研究もバルト研究もそうした取り組みと無関係になされたのではなかったことに注意が向けられなければなりません。以下、諸論文、エッセーのテーマの変遷、アクセントの置き方の変化などを手がかりにして、先生の関心の在り方、その変化——それは時代の変化でもあったと思いますが——、それを、厳密にでないとしても、まず少しはつきりさせることから始めたいと思います。

1. 京大大学院を1954年3月に修了した小川先生は、4月に日本ルーテル神学校専任講師となり、1959年4月から東京女子大文理学部専任講師に就任されます。翌1960年10月、バーゼルのバルトのもとに博士候補生として留学されます。留学以前に『福音と世界』に書かれたもの5本、座談会1回（「福音のコミュニケーション」）はすべて学生時代から取り組んだキルケゴールとその思索に触発された内容のものです。帰任されたのは1963年4月。2年8ヶ月の留学中に寄稿したのは、1962年3月の「日本的ということ——外から見た内での自分」の一編だけでした。研究に励んでいたことを証するとともに、思想的発展を知る上で貴重な文章です。

2. 東京女子大に戻られてから60年代の終わりまでは、もっとも多くの論考が発表された時期です。（主著『主体と超越——キルケゴールからバルトへ』は、この時期に書かれた諸論文が1974年にまとめられたものです）。この間の『福音と世界』への執筆は30本近くにのぼります。当然のことながらバルトとそれに関連するものが取り上げられ、さらにプラハ会議への参加を軸に「平和」の問題が論じられ、それはアジアの平和の問題にまで広がっていきます。しかしプラハ全キリスト者平和会議との関係は頓挫し、その記録としても貴重な「ある平和運動の理念と運命——プラハ・キリスト者平和会議の場合」（1971年11月）——全日本キリスト者平和会議国際連帯委員会の名による「声明」文とともに掲載された——が、この時期の終わりを明示する報告論文と言ってよいでしょう。

<sup>2</sup> 「…神学は、信仰者の神への応答において成立するのであって、本来は決して知識の集積でもなく、また信仰の実践と排他的に対立するものでもない。むしろ神学は信仰の実践と相表裏し、信仰者をして信仰の実践へと出て行かせるものである。またそうあるべきなのである」（『信仰と学問』『福音と世界』1956年2月、11頁）。

この時期の終わり、すなわち、60年代末から70年代初めにかけて、靖国や万博の問題をめぐって起こった日本基督教団内の争い、また世界的なステューデント・パワーの爆発に連動して起こった大学紛争に関連して、教会ならびにキリスト教主義大学の在り方を問い直すエッセーが『福音と世界』に発表されています（「キリスト教の今日的姿勢Ⅰ——教会の造反と革新」1969年12月。「キリスト教の今日的姿勢Ⅱ——キリスト教大学の可能性」1970年1月）。教会についても大学についても、生起しつつある事態を冷静かつ慎重な姿勢で理解しようとするとともに、原理的な問いかけがなされています。あれから40年以上もたってしま読むと興味深いものがあります。これ以上の発言を誌上でなせることはありませんでしたが、大学の教員として、神学者として、そしてキリスト者としての歩みの隠れた転換点になったように思われます。

3. 70年代に入り、しばらくたって、『福音と世界』に発表される諸論考のテーマが一変したことが誰の目にも明らかになります。関心の対象・研究の対象として、日本キリスト教史が浮上します。1972年1月の「日本キリスト教史への一視点」は、小論ながら、その間の事情を明らかにしています。それによると、「六九年いらいの根底的な激動」の経験が、その背景にあります。いま何をしなければならないか模索する中で、「日本キリスト教史を、明治期におけるその出発点から考え直すという仕事」が、当面の、しかしおそらくもっとも重要な課題として見えてきたのです<sup>3</sup>。自分の立ち位置を日本キリスト教史の出発点から考え直してはっきりさせたい、その上で新たな方向性を探りそれを確かなものとしたという実存的な関心が、その背景にはありました。1975～76年にかけて、7回にわたり、「植村正久と日本の教会」という主題で堀光男、土肥昭夫、小川圭治によるきわめて刺激的な座談会が掲載され、その後も80年代の中頃まで賀川豊彦をはじめとして、北森嘉蔵、滝沢克己など、多くの日本人キリスト者を取り上げる連載エッセーを書いています。

<sup>3</sup> 「六九年いらいの根底的な激動を経験し、歴史の歩みと現在の状況の渦の中に、またしても自己を見失いそうになりながら、その中における自己を再確認し、自己の自立の回復をめざすという内面的な仕事の中で、私には、四つばかりの思想的支柱が必要になってきた」とし、以下の諸点を列挙している。第一に宗教改革のとらえ直し。第二にヨーロッパの教会状況の中でバルトが批判的原点を少しもあいまいにしなかったことの意義の把握。第三に、「日本文化の根底にあるもの」とらえ、それとの対決の道を模索すること。そして第四のこととして、次のように記している、「そして最後に、これらの支点によって与えられた新しい視座から、日本のキリスト教史を、明治期におけるその出発点から考え直すという仕事である。これらの問題点を現在の自分の直面する課題との関連で深めて行き、それをひとつの中心へと収斂させることによって、六九年いらいの事態がなにであったか、そこにおける自分の行動がどのような意味をもつものかを次第に明らかにすることができるのではないかと考えている」（「日本キリスト教史への一視点」『福音と世界』1972年1月）。

ただ日本の思想、日本キリスト教史に対する小川先生の関心は、この時はじめて出てきたのではないことは、注意しておく必要があります。本格的な関心が60年代の中頃に芽生えています。「比較文化」(東京女子大学比較文化研究所 25-1, Oct.1978)に「私にとって、日本キリスト教史への関心の扉を開いていただいたのは石原謙先生であった」と書いています。日本に対する関心は、キリスト者の生き方を問う問題から出発した先生にはもともとあったと思われます。キルケゴール研究でも早くから「日本における」その受容の問題を取り上げており、東京女子大比較文化研究所の「総合研究」として、1972～74年には、「公会主義とその意義」が掲げられます。1973年に出版された編著『日本人とキリスト教』はその成果の一部でした。

それに関連して、同研究所の総合研究として池明観の全面協力によってなされた日韓教会交流に関する研究も、日本キリスト教史研究の一環、その広がりとして理解することができます(『日韓キリスト教関係史資料1878-1922』としてまとめられ、1984年に刊行された)。この仕事を最後に、小川先生は19年つとめた東京女子大を辞し、1978年9月、筑波大学に哲学・思想系教授として移ることになります。

4. 80年代に、もう一つ重要な領域の諸論考があらわれます。それが、70年代の半ばからWCC〔世界教会協議会〕の信仰職制委員会常任委員として世界教会運動に関わりはじめたことにより生まれた、ことに「リマ文書」に関する会議の報告や諸論文です(「教会の真の一致をめざして——コロンボ会議からリマ会議へ」1982年5月、他)。同委員会の常任委員として、たとえばラテン・アメリカの教会と交流を深める中で記されたいくつかのすぐれた訪問記は、今日では貴重な資料的価値ももっていると言ってよいでしょう。90年代は、大学の学長、院長としての責任を負われるなど、『福音と世界』への寄稿は少なくなりますが、書評やエッセーという形で種々の文章が発表されます。フォーカスは「和解」と「和解の倫理」に向けられていたように思われます。

こうして見てくると『福音と世界』に寄せた諸論考は、大学とその付属施設における研究を基礎にしつつ、先生の神学的な歩みを忠実に映し出していると言えます。敗戦の精神的混迷から脱け出すべく取り組んだキルケゴール、朝鮮戦争を機に発足したキリスト者平和の会への参加と平和運動との取り組み、日本キリスト教史の本格的な研究、そして真実の一つなる教会を目指すエキュメニカル運動への参与などです。そしてこれらを振り返り、あらためてその根底に「真のキリスト者となる」という、先生が最初に出会ったキルケゴールのテーゼが一貫していたとの思いをいま深くしています。

## (3)

『福音と世界』でたどった小川先生の歩みのいくつかを、以下、もう少し詳細に取り上げ、どのように継承するのかという今日のシンポジウムの課題を念頭において申し上げてみたいと思います。

1. (平和への取り組み) 『福音と世界』を見るかぎり、留学から帰ってからの10年間、つまり60年代の小川先生を動かしていた最大の問題は平和でした。ただ平和の問題に関わりはじめたのは、じつは早く、それ以前、つまり京都の学生時代にさかのぼります<sup>4</sup>。その時代先生は、「基督教学徒兄弟団」(関西学院を中心に久山康、武藤一雄らによって結成された)に加わり、兄弟団を中心としてはじまった平和活動に参加します。京都の吉田教会で1951年5月14日に開かれた「関西キリスト者平和の会」の発起人に名を連ねています<sup>5</sup>。上京後は、智子夫人の母教会の信濃町教会に移るとともに、東京における「キリスト者平和の会」(1951年2月発足)の一員として、井上良雄先生、森岡巖さんらと活動し始めることとなります。

早くから平和の問題に取り組んだ小川先生がその後国際的な視野をもって、日本を代表して活動する最初のきっかけになったのは、留学中にバーゼルから参加した第一回のプラハ全キリスト者平和会議(1961年6月)でした。これにはバルトも参加を勧めたと聞いています。第二回(1964)、第三回(1968)と参加し、それぞれ詳細、かつすぐれた報告を『福音と世界』に寄せておられます。1967年の日本でのいわゆる「アジア・ゼミ」の開催など、小川先生とともに、日本の教会が、世界ともっとも近接していた時代であったかも知れません。第四回会議の問題点と、会議の地域委員会の役割を果たしてきた全日本キリスト者平和会議の国際連帯委員会が代表派遣を拒否し、会議と断絶した次第は、先に挙げた1971年1月の論文にある通りです。ただ小川先生が1966年頃から書記として事務局を引き受け、「キリスト者平和の会への私の参加」<sup>6</sup>という文章で「結成と挫折」という言葉で振り返っている全日本キリスト者平和会議(プラハ会議参加者の呼びかけで結成された)そのものについて語ったものはありません。1969年1月の「1969年——キリスト

<sup>4</sup> 「平和の会への私の参加」としては、次の三つのトピックスがある。第一は、近畿キリスト者平和の会創立前後の参加で、第二は、プラハ全キリスト者平和会議への参加と脱退の問題であり、第三は、平和の会の国内連帯と国際連帯の組織としての全日本キリスト者平和会議の結成と挫折であった」(「キリスト者平和の会への私の参加」『平和の主に従って——キリスト者平和の会文集』雨宮新編、2001年)。

<sup>5</sup> 「キリスト者平和の友」第2号、1951年7月13日付、参照せよ。

<sup>6</sup> 注4を見よ。

教平和運動の展望」という特集の枠の中で執筆された「平和運動の連帯」という論考が、この時期のキリスト者平和運動の組織のあるべき姿を語りながら、その困難さを垣間見させてくれているだけです。

「平和」それ自体を論じたものは『福音と世界』にはあまりありません<sup>7</sup>。しかしその中で「創造的・力動的現実としての平和」（1968年1月）が、先生の平和論を簡要な形で示しています。その中で、1968年を迎えて平和運動の諸課題が具体的にあげられ論じられていますが、何よりその前提としての聖書の平和理解を、次のように述べています。「〈平和〉とは、聖書によれば、全人的な人間を擁護することにおいて成立し、それを妨げるあらゆる非人間性、虚無への意志との戦いによって実現される。それを支えるものは、和解をもたらす主キリストであり、その恵みによって生きる自由な新しい人間である。したがって、〈平和〉とは、<sup>ダイナミック</sup> 静止的な状態をあらゆる欠如概念ではなく、力動的な終末論的現実なのである。このような聖書のいう〈平和〉の視点に立って〈平和〉に対する教会の明日の使命を考えてみなければならない」と<sup>8</sup>。ここには「あらゆる非人間性、虚無への意志との戦い」へとわれわれを具体的に促す平和理解が提示されていると言ってよいのではないのでしょうか。

2.（教会一致を求めて）60年代に「平和」が追求されたとすれば、70年代、とくにその後半から80年代前半にかけて、世界教会運動に参加し、教会の真実の一致が追求されます。ただこれは、平和の問題が先生においても過去のものとなったということではありません。どうしてそういうことはあるのでしょうか。そうではなくて、平和のための活動がいわば局面を変えて世界教会の一致を求める運動として継続されたと理解したいと思います。

小川先生がエキュメニズムに目が開かれたのはバーゼルの留学時代です。留学中に『福音と世界』に寄稿した唯一の文章として先に挙げた「日本的ということ——外から見た内での自分」でそれに言及しています。WCCの奨学生としてクルマンの監する神学寮に住み各国から来た人と交流し、プラハ平和会議、ボセーのエキュメニカル・コースに参加す

<sup>7</sup> 「キリスト者平和の友」第51号、1956年10月1日付に、小川先生は「教会形成と平和運動」という短文を書いている。それによれば、「今日のキリスト教平和運動の出発点は、何といても、太平洋戦争中の我が国の教会の在り方に対する根本的反省というところにあった」とした上で、平和の会の二重の課題を指摘している。その第一は、平和の証しが全教会の名の下になされるように「まず教会自体の覚醒を祈り求めなければならない」ことであり、第二は、「次々と起こって来る事態の中で、正しく適切な意志表示をして行くことである」。

<sup>8</sup> 小川圭治「虚無への意志との戦い」（『平和』関東学院大学・短大キリスト教双書V、73～97頁、1968年）、参照。『福音と世界』の論文は、この「虚無への意志との戦い」をふまえて書かれたものと思われる。

中でだんだん分かってきた、と<sup>9</sup>。

WCCの活動に本格的に関与することになったのは、1975年の第五総会期信仰職制委員会常任委員に選出されてからです。この期の委員会に託された仕事は「アクラ文書」(50年に近い信仰職制運動の成果が、バプテスマ、聖餐、教会の職務に関して集大成されたもので、1974年にアクラで採択された。なお小川先生は『洗礼・聖餐・職務』日本基督教団出版局〔1985年〕で「アクラ文書」の翻訳・解説を担当した)への世界の教会からの応答を精査し、最終的な合意文書として仕上げることでした。最終案は、1982年、リマで決定され、1983年の第六回総会で承認されました。これがいわゆる『リマ文書』です。カトリック、正教会、プロテスタント諸教会からなる委員会で採択されたもので、将来のエキュメニカル運動を先取りする画期的成果であり、文字通り「教会一致の里程標」となったのです<sup>10</sup>。

3. (日本の宣教と教会形成) 最後に、70年代半ば～80年代、世界教会運動への参与と同時期に並行して取り組まれていた日本キリスト教史研究に短く触れたいと思います。堀光男、土肥昭夫、小川圭治の三人による、「植村正久と日本の教会」という主題の座談会が、『福音と世界』に7回にわたり掲載されたことは、すでに触れた通りです。いずれも刺激的なものですが、第二回「横浜公会とは何であったか」(1975年8月)は、私にはとくに興味深いものです。先生はそこで率直に「公会主義」への思い入れを語っています。「公会主義について、私はロマンティサイズしているという批判もうけましたが、私はそれをロマンティサイズしているといわれるほどに、理念として掲げたいのです。ただしその理由は、それを純粹に理念として設定することにより、初めに堀さんが言われたように、『それが教団において実現されている』というように教団擁護というか、教団の自己弁護のかくれみのに用いるというのとはまったく正反対のことを考えているのです。むしろ、公会主義というものを本当の意味で理念として設定することによって、日本の教会の現状に対するきびしい批判の原理を導き出したいと考えているのです」と。

この発言を理解するには先に挙げた『日本人とキリスト教』(1973年)や、「公会主義——その理念と運命」(一)(二)(『東京女子大学比較文化研究所紀要』38, 39巻, 1977,

<sup>9</sup> 「内での自分は、今にして思えば、あの日本の問題と真剣に取り組むというような一種の悲壮感に陶醉していて、実に視野が狭く、ものを知らなかったと思い知らされました」(1962年3月)。

<sup>10</sup> 小川圭治「教会一致の里程標——「リマ文書」の意義と課題——」(『礼拝と音楽』43号, 1984年)。なお神田健次さんは、リマ文書に関連し日本人で顕著な貢献をした人として二人の名を上げている。一人は小川圭治であり、もう一人はリマ文書成立後小川先生の仕事を継承した今橋朗である(神田健次『現代の聖餐論』日本基督教団出版局, 1997年, 233頁以下)。



1978年)などをよく読む必要があります。『日本人とキリスト教』に寄せた「教会の形成と変質——異教社会におけるキリスト教」に要点は語られています。それによると、小川先生は、明治5年から20年代前半までのめざましい発展を遂げた教会と、30年代後半からの教会とのあいだの本質的相違に着目し、これを変質としてとらえ、先生独自の、宣教と教会形成の理念型、すなわち、「ミッション型」と「プロパガンダ型」<sup>11</sup>の対比によってとらえようとしています。明治前期の教会、すなわち、公会主義から農村教会の形成へという線はミッション型を示しており、「下から」の内発的近代化のエートス、換言すれば、新しい価値観の創造、意識変革・社会変革にかかわっていた。しかしこうしたミッション型は公会主義の挫折・農村教会の崩壊とともに変質します。閉鎖的な教派主義の流入だけでなく、決定的には「儒教道德の体裁をととのえた家族主義的倫理とそれを支える疑似宗教としての天皇制」の定着にその原因を見えています。かくて明治後半から大正時代にかけての教会は、都市のインテリ、学生など、教会員の属する社会層の変化とともに、社会の人間関係を支えているエートスそのものと戦い、対決しつつ新たに創造する力を失ったと分析しています。

先生の言うように、まさにこの明治後半の教会が今日の日本の教会の原形と体質を形作ったとすれば、そこには、大きな問題がひそんでいると言わざるをえません。しかし小川先生は、この論文で、最後に、次のように力強い言葉を記しています。少し長くなりますが、引用しておきます。

もちろん、このような教会形成の変質によって、理念としての公会主義、ミッション型の教会形成が、その後の日本キリスト教史から完全に姿を消したというのではない。むしろ、すでに述べたように、公会主義の含んでいた要因、たとえば超教派、自主独立、聖書中心、長老主義などの四つの要因をはじめ、その他の要因は、それぞれ独立の理念または課題として今日の日本の教会にまで受けつがれている。その中には、ほ

<sup>11</sup> 19世紀以来、ドイツのプロテスタント神学では、海外宣教の型を、プロパガンダとミッションに分ける考え方が行われてきたが(J・D・ランゲ、M・ケーラー、さらにバルトも)、それを継承し、小川先生が独自に生み出した概念。たとえば次のように説明される。「西欧キリスト教社会の絶対優位を前提し、植民地主義的、帝国主義的拡張政策と密着して、支配階級の改宗によって、権力と財力にバックアップされて行なわれる『布教型』と、キリスト教社会も非キリスト教社会もともに罪人の社会であり、普遍救済論の立場から両者の連帯が可能であることを前提し、西欧キリスト教国の政治・経済的政策とは結びつかず、イエス・キリストの権威の下において、非キリスト教社会の人たちに対して神の僕として仕えることによって、下層の人たちの意識転換を通じて、古い共同体規制と抑圧からの解放を実現しようとする『宣教型』とである」(『新しいイエス像とアジアの神学』『福音と世界』1984年9月)。

ほ実現に近くなったものもあり、まだ程遠いものもある。この意味では公会主義はなお理念としては生きており、今日の日本における教会形成の課題と希望を示しているとは私は考えている。…公会主義の各要素がばらばらに切り離されて抽象化するのではなく、それらが具体的な教会形成の場で、現実の日本の社会とその精神的基盤と対決しつつ、互いに火花を散らして切り結ぶのでなくてはならない。そこにはじめてミッション型の教会形成が可能になるのである。日本の教会の課題は、ローマン主義的逃避の殻を破って、理念としては存在するが「受肉」しないという壁を突破することによって、日本の近代化のひずみと矛盾を告発し、力強く明日を築く精神的価値基準を、明瞭に提示することにあると私は考える。それが明治期のキリスト教史が、われわれにおくりとどけた問いであり、課題であると思う<sup>12</sup>。

これが、公会主義を理念として設定することによって、日本の教会の現状に対するきびしい批判の原理を導き出したということの意味です。ここで使われている、「私は考える」という、ある意味で非常に強い言葉は、小川先生の確信と希望を明瞭に伝えており、それはわれわれに対する問いでもあります。

さてここまでまことに不十分ながら小川先生の神学的足跡を辿ってきました。戦争の根本的反省から平和のために歩みはじめ、そうした平和をこの日本でにないうる教会の形成をめざし真のキリスト者となる道を歩み抜かれた先生の足跡を前に、われわれは今日、どのように応答し、どのようにわれわれ自身の道を歩むのでしょうか。こうした問いと課題とを、先生は、キリスト者としての、神学者としての、その歩みそのものをもって、われわれに投げかけています。

2013年1月6日

---

<sup>12</sup> 「教会の形成と変質——異教社会におけるキリスト教」『日本人とキリスト教』314～315頁。